

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

さらば復讐の狼たちよ (讓子弾飛 / LET THE BULLETS FLY)

2010年・中国映画
配給/ファントム・フィルム・132分

2012 (平成24) 年7月20日鑑賞 TOHOシネマズなんば別館

Data

監督: 姜文 (チアン・ウェン)
原作: 馬識途 (マー・シートウー)
短編集『夜譚十記』の中の『盗官記』
出演: 周潤發 (チョウ・ユンファ)
/ 葛優 (グオ・ヨウ) / 姜文 (チアン・ウェン) / 劉嘉玲 (リウ・カ・リング)
(カリナ・ラウ) / 姜武 (ジャン・ウー) / 邵兵 (シャオ・ピン) / 廖凡 (リャオ・ファン) / 周韻 (チョウ・ユン)
/ 陳坤 (チェン・クン)

👁️👁️ みどころ

姜文が監督し、周潤發、葛優、姜文という三大俳優が共演！1920年代の軍閥が割拠する時代、ギャングと言えども腐敗した権力には牙を！西部劇風の風刺映画である点は、張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督の『女と銃と荒野の麴屋』(09年)と同じだが、構成力とスピード感において見るモノを圧倒！

中国では歴代興行収入NO. 1だが、さて平和ボケと政治ボケが著しい日本では・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■中国では歴代興行収入NO. 1だが、日本では・・・■

映画検定4級・3級の受験勉強で私は、全世界で最高の興行収入を挙げた映画ははじめて10億ドルを超えた『タイタニック』(97年)で、総興行収入は18億4500万ドル(1ドル100円とすると約1800億円)と学んだ(『映画検定 公式テキストブック』(キネマ旬報映画総合研究所)306頁参照)。他方、Wikipediaの「最高興行収入映画の一覧」によると、全世界収益のベスト1は『タイタニック』で、全世界収益約21億8500万ドルと表示されている。そして、長年続いたその地位を破ったのが、ジェームズ・キャメロン監督の『アバター』(09年)(『シネマルーム24』10頁参照)で、その全世界収益は約27億8200万ドルに達したそうだ。他方、人気のハリウッド映画が多数「流入」している中国では、『レッドクリフ Part I』(08年)(『シネマルーム21』34頁参照)や『パイレーツ・オブ・カリビアン』(03年)(『シネマルーム3』101頁参照)などの興行収入が目立っていたが、本作は軽くそれらを超え、中国映画歴代興行収入NO. 1のメガヒットとなつたらしい。

日本では1960年代前半は「五社協定」が貫徹していたが、60年代後半になると石

原裕次郎、三船敏郎、勝新太郎、中村錦之助らのスターが「独立」を志すとともに「スタープロ」を興し始め、『黒部の太陽』（68年）では石原裕次郎と三船敏郎のビッグ共演が実現した。そんな視点で考えると、周潤發（チョウ・ユンファ）、葛優（グオ・ヨウ）、姜文（チアン・ウェン）の3人の大スターが共演した本作は、石原裕次郎と三船敏郎に勝新太郎や中村錦之助が加わったようなものだから大ヒットも当然？もともと、『黒部の太陽』は社会性の高い問題提起作として注目されながら興行的には必ずしも成功しなかったが、本作は中国では大成功！しかし、日本で本作を上映しているのは2番手の映画館だし、私が観た時の映画館の観客はまばら。中国で大ヒットした要因は後に述べるが、中国人の著名俳優だけで多くの日本人を映画館に呼べるとは思えないし、本作の中味から見てもそこで快哉を叫ぶほど本作（の皮肉）を理解できる日本人は少ないだろう。そう考えると、日本では『初恋のきた道』（00年）（『シネマルーム5』194頁参照）や『山の郵便配達』（99年）（『シネマルーム5』216頁参照）などの中国映画が大ヒットしたが、本作の日本での大ヒットは難しいかも・・・。



『さらば復讐の狼たちよ』 配給：ファントム・フィルム TOHO シネマズ六本木ヒルズほか全国公開中
2010 EMPEROR MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING BUYILEHU FILM AND CULTURE LTD. ALL RIGHTS RESERVED.

■□■ 『七人の侍』ならぬ七人のギャングの目的は？志は？ ■□■

映画冒頭、指名手配中のアバタのチャン（チアン・ウェン）率いる7人のギャング団が線路上を走る馬列車に乗った県知事マー（グオ・ヨウ）を襲う、楽しくも迫力あるシークエンスから始まる。チャンの銃から放たれた弾が次々とピンポイントで「ある箇所」に命中し、続いてチャンたちギャング団が線路上に設置した「ある妨害物」によって、マーと

マーの妻（劉嘉玲／カーリーナ・ラウ）、書記のタン（馮小剛／フォン・シャオガン）が乗っていた列車が空を飛んでいくから大変。しかし、顔をマージャンの「ピンズ」の覆面で覆ったチャンたちが、この馬列車を襲った目的はナニ？かろうじて死亡を免れたマーはチャンの尋問に対して、とっさに自分の身分を書記だと偽り、チャンに対して「鵝城の知事になれば、税金を取り立てることによって大金持ちになれる！」と「提案」したが、さてこれに対するチャンの対応は？



『さらば英雄の掟たちよ』 配給：ファントム・フィルム TOHOシネマズ/木本ヒルズ/まか全興公映中
2010 EMPEROR MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING BUYILEHU FILM AND CULTURE LTD.
ALL RIGHTS RESERVED.

この襲撃のシーンは『怪傑ゾロ』を彷彿させる痛快さだが、ゾロが金持ちや権力者から金を奪うのは庶民にこれを分け与えるため。しかし、チャンたちの目的が馬列車を襲って金を奪ったり、金を奪うためにマーの話に乗るだけだったら、チャンたちは「義賊」ではなく、ただの賊＝ギャングになってしまう。黒澤明監督の代表作『七人の侍』（54年）は7人の侍それぞれが侍の志を持って村人たちを指導し護ったが、チャン率いる「七人のギャング」たちの目的は？その志は？

■□■軍閥が支配する1920年代の中国は？■□■

2011年は辛亥革命100周年の年だったから、『1911』（11年）『シネマルーム27』81頁参照）や『孫文の義士団（十月圍城）』（09年）『シネマルーム26』143頁参照）等の注目作が登場した。辛亥革命によって中華民国の初代臨時大総統に選出された孫文が手を焼いたのが袁世凱だが、地方に割拠していたこれらの軍閥とは？日本人は概してそういう知識に疎いから、袁世凱の軍事力を利用するため、大総統の地位を孫文から譲られた袁世凱がその後どんな無茶なことをやったかもあまり知られていない。本作は、中国各地をそんな軍閥が支配していた1920年代の物語だが、本作が監督4作目となるチアン・ウェンはなぜそんな混沌とした時代を選択したの？まずはそんな点に注目を！



『さらば英雄の掟たちよ』 配給：ファントム・フィルム TOHOシネマズ/木本ヒルズ/まか全興公映中
2010 EMPEROR MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING BUYILEHU FILM AND CULTURE LTD.
ALL RIGHTS RESERVED.

冒頭のシークエンスを見ていると、二弟から七弟までの個性ある若者を率いるチャンは智謀豊かかつ策略にも長けているが、あくまで陽気。魅力あるリーダーになるためには、

この陽気さが必要だ。逆に、マーの方はどんな状況に置かれても自分の生きる道を見つけ出すズルさに長けているし、その夫人も変わり身の早さと度胸の良さにかけてはピカー。チャンがマーの話に乗ったのはマーの話を全面的に信用したからではないことは明らかだが、チャンの描く



『さらば権力の駒たちよ』 配給：ファントム・フィルム、TOHOシネマズ、木本ヒルズほか全国公開中
©2010 EMPEROR MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING BUYILEHU FILM AND CULTURE LTD.
ALL RIGHTS RESERVED.

の県知事としての戦略は？他方、新任の県知事チャンと新書記マーを迎えたのは、鵝城を金と暴力で牛耳る独裁者ホアン（チョウ・ユンファ）。さかんに望遠鏡でチャンやマーたちの行動を探索するホアンの姿や、自分とそっくりさんの「替え玉」を用意しているホアンの周到さを考えると、いくら県知事でもこの町を支配するのは難しそうだ。チャンは本当にこのホアンという男から金を巻き上げる気？

本作をしっかり味わうためには、日本の「戦国時代」とは趣を全く異にする、中国1920年代の軍閥割拠時代の特徴をしっかり理解することが不可欠だ。

■□■あの手この手の騙し合い！この「権力闘争」は面白い！■□■

張藝謀（チャン・イーモウ）
監督の『女と銃と荒野の麴屋』

（09年）は西部劇風のB級映画として面白かった（『シネマルーム27』104頁参照）が、本作は双方にホアンの替え玉、偽のアバタのチャンが登場するとともに、ピンズの覆面をした偽のギャング集団が登場してチャンの屋敷を襲撃するなど、あの手この手の



『さらば権力の駒たちよ』 配給：ファントム・フィルム、TOHOシネマズ、木本ヒルズほか全国公開中
©2010 EMPEROR MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING BUYILEHU FILM AND CULTURE LTD.
ALL RIGHTS RESERVED.

騙し合いが面白い。チャンとホアンの「対立」が生まれたのは、マーの勧めに応じて（？）、県知事の重要な権限である税金徴収権を欲しいままにするべく、鵝城の知事になりすましたチャンの前に鵝城の実権を握る独裁者ホアンが立ち上がったためだ。もともと2人の「対立」が激化する中、チャンは別の見事な策略によって地元の資本家たちから大金を巻き上げることに大成功！したがって、それで満足すれば良かったのだが、なぜかチャンはそれを貧しい庶民たちに分け与えてしまったから、やっぱりチャンは義賊？いやいや、そう単純でないところが本作の面白さだ。どうやらチャンはその金がホアンから吐き出させ

たものでなかったことが不満だったようで、ここにあらためてホアンとの闘いを宣言！しかし、この時点でチャンは既にチャンが息子のようにかわいがっていた六弟（張默／チャン・モー）を殺されていたし、またマーはその夫人を失っていたから、チャン・マー連合軍（？）が負った傷はかなり大きかった。したがって、これ以上ホアンとの権力闘争を続ければ、その犠牲はさらに増大するのでは？もとより、チャンはそれは覚悟のうえ。そんな風に腹を決めたチャンは、以降少し無口になりながら（？）、自らの立てた計略を次々と実施！他方、ホアンだって騙し合いにかけては負けてはいない。そして「地の利はこちらにあり」とばかりに、クライマックスに向けては地雷の活用まで。さあ本作中盤からクライマックスに向けて展開される、2人の騙し合いと血みどろ対立の面白さをじっくりと。



『さらば復讐の狼たちよ』 原題：ファントム・フィルム TOTO シネマが木木セルビアを全面公開中
2010 EXETER MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING FILM AND CULTURE LTD.
ALL RIGHTS RESERVED.

■□■この邦題に異議あり！■□■

私は本作を映画館で観る前に、日本語字幕なしのものをパソコンの画面で観ていた。また、私の中国語学習も3年半となり中国語検定3級にも合格したため、本作の原題『讓子彈飛』の意味がよく理解できた。これは英題の『LET THE BULLETS FLY』と同じで、「銃弾を飛ばせ」という意味。映画冒頭のシークエンスはこの原題がピッタリだし、映画中盤も1920年の中国であるにもかかわらずやたらに拳銃がブツ放されるから、原題にニンマリ。さらに、わずか数人でホアンとの最後の決戦に挑むチャンたちが鉄製の城壁（？）にやたら銃を撃ちまくって穴をあけるシーンは欲求不満の解消にもってこいだが、これがその後の民衆蜂起のうねりの中、大きな意味をもってこようとは……。またマーの夫人は既におばさんだから（？）本作の事実上の「紅一点」となった、ホアンのハーレムの売春婦ホアジエ（周韻／チョウ・ユン）の破天荒な行動も拳銃を伴ったものになっているから、それにも注目！そうこう考えると、本作には原題がピッタリだ。

それに対して邦題の『さらば復讐の狼たちよ』は、「さらば」と「復讐」と「狼たち」という過去の名作のタイトルをくっつけただけの感じだし、本作のストーリー構成にもあまりマッチしていない。たしかに、原題をそのまま「銃弾を飛ばせ」と訳しても何のことがわからないからそれでは宣伝しにくいかもしれないが、そのタイトルを理解させることが本作の面白さを広く知らしめることになるのだから、あくまで王道を行った方が良かったのでは。その意味で、私はこの邦題に異議あり！

■□■本作の真のテーマは？姜文監督の真の狙いは？■□■

今年2012年は日中国交回復40周年の年だが、尖閣諸島問題を始め、日中間の問題点は多い。また、日本国内の政治・経済がメチャメチャになっているのは言うまでもないが、中国国内のそれも薄熙来（ポーシーライ）事件に象徴されるように、中国共産党の主導権争い（権力争い）が激化していることは明らかだ。辛亥革命が起きたのは今から100年前の1911年だが、その成功は清王朝の支配に対する民衆の不満が高まる中、孫文ら知識層がそれをうまく集約することができたためだ。しかして、今の中国はたしかに表面上は経済成長を謳歌しているが、その実、権力中枢部の権力闘争、党と政府幹部の腐敗、経済格差の拡大を中心として民衆の不満はどんどん大きくなっている。そのうえ中国は中国共産党の一党独裁の国だから中国共産党批判は許されないし、基本的に表現の自由は存在しないから、ネットが広く活用できるようになっても民衆の不満は容易に解消していない。



『さらば復讐の狼たちよ』 配給：ファントム・フィルム TOHO シネマズ六本木ヒルズほか全国公開中
2010 EMPEROR MOTION PICTURE (INTERNATIONAL) LTD. BEIJING BUYILEHU FILM AND CULTURE LTD. ALL RIGHTS RESERVED.

そんな昨今の時代状況の中、本作が登場したわけだ。本作では、何よりも地方都市・鵝城におけるホアンの独裁が顕著だが、その権力の基盤は一体どこに？また、知事の座をカネで買うことによって、県知事に就任しようとするマーの冒頭のはしゃぎようを見ると、「盗官」が日常茶飯事だったことがよくわかる。チアン・ウェンは俳優としてはもちろん、監督としても『鬼が来た！（鬼子來了）』（00年）（『シネマルーム2』19頁参照）によって大きな社会的反響を呼んだことは有名。しかし、そんな「表現の自由」は中国では許されず、中国当局の検閲を通さずに海外で上映したため、その後「5年間、国内での映画製作禁止処分」を受けてしまった問題監督（？）だ。そのチアン・ウェンが1920年代の軍閥割拠時代という設定ではあるものの、監督としてよくまあ大胆にこんな問題提起を！しかして、本作の真のテーマは？チアン・ウェン監督の真の狙いは？

2012（平成24）年7月25日記